



# エディプス・パーティ

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

## Contents

1

2

3

4

5

6

7

8

★タップすれば各章へジャンプします

1

…えっ!?  
…ど、どうしよう…??

映一は、突然、階下から聞こえた父の声に、思わず椅子から立ち上がった。

「……映一、いるのか？」

その声は、すでに階段のすぐ下まで来ている。

「……あ。う、うん」

黙っているのもまずい気がして、とっさに返事したのだが、声が妙にうわずった。

「なんなんだ、いるのに、家中鍵をかけて。上がるぞ。ちよつと話があるんだ」

……そんな。どうしたらいいんだ？

自然に、膝ががくがくふるえた。そのせいで、着ているピンクのワンピースの裾が揺れた。

ふだん、部屋に入ってくることなどまずないのに、なんで、こんな時に……。それにだいいち、父は今、会社へ行っているはずの時間ではないか。

おたおたしている映一をよそに、足音は、すでに階段を昇りはじめている。

とにかく、どうにかしなければ……。

映一はあわててベッドにもぐりこみ、ドアに背を向けるかたちで寝て、首のところまで布団をかぶった。

これで、とりあえずは、ワンピースも、そして顔の化粧も見えない。髪はもともと長いのだから、父が部屋を覗くというだけなら、うまくやり過ごせるかもしれない。

「入るぞ」

ノブをまわす音がし、ドアが開いた。

「……ん、どうしたんだ？」

部屋に入るなり、父は言った。当然ながら、ベッドで寝ている映一の姿を不審に思ったのだ。

「……あ、う、うん。ちよつと……体調悪くて」

映一は父の方を向かずぼそぼそと——そのじつ、心の中では父がこのまま出ていってくれることを強く祈りながら——言った。

しかし父は、逆にそんな映一の様子が心配になった

のだらう。

「……だいじょうぶか？」

部屋の中へ三四歩入り込んできた。そんなに広い部屋ではない。すでに父は、ベッドのすぐそばまで来て  
いる。

父に顔をのぞき込まれそうで、映一はさらに布団を  
引き上げ、顔をまくらに埋めこむようにした。そして、  
父にこれ以上なにかを考えさせまいとでもいうように

聞き返した。

「なに、話って？」

しかし、それは、ものを聞くというには、いかにも不自然な態度だった。

「うむ：：？」

父はひとこと言ったあと、沈黙した。部屋の中を見まわしているにちがいない。

絶体絶命だった。

ベッドの中で、映一の心臓は早鐘のように刻んでいた。

まさか父が帰ってくるなどとは思っていないから、部屋の中はなんらかたづけていない。要するに、「作業の痕跡」が残ったままなのだ。

机の上にはメイク用のミラースタンドと、ふたが開いたままのパールピンクのマニキュアが置いてある。化粧品類が並べてあるひきだしも引き出したままにな

っている。それどころか、たんすの前には、淡いピンクのブラと何枚かのスキヤンティが出たままだ。先刻、床に並べ、どれを着けようか迷ったからだ。

今、父はそれらを見ている。

いったい、なんと思うのだろう。

映一は、布団の中で体を硬くしながら考えをめぐらせた。

父のような、世の中の「標準」をひたすら歩いてき

た男にとって、「女装」などということとは、思いも及ばないことにちがいない。今日の前にある光景を、その「標準」と折り合いをつけて理解しようとするだろう。おそらくは、「映一が女性の下着を見て自慰していた」、あるいはもしかすると、「映一には女性下着の盗癖がある」とでも思うのだろうか。

まあ、どちらにしても、今布団の下に隠している姿を知られるより、いくらかはましな気もするが……。

「お前、もしかして……まさか……」

父が、ぼそりと言った。

まさか、なんだと言いたいんだろう？

映一は、布団をかぶったまま、父の次の言葉を待った。

と、一拍おいて次の瞬間、布団がいきなり強い力ではぎ取られた。

「……あ」

その力にあらがって布団にしがみつこうとしたせいで、逆に引っ張られ、映一は上半身を起こすことになった。結果、父に背を向けてベッドの上に横座りするようなかたちになってしまった。背後に息をのむ父の気配を感じながら、映一はその姿勢のまま固まった。

息子のワンピース姿に、父はやはりショックを受けたにちがいない。しばらく声も出ないようだった。

なんだか、息詰まるような時間がつづいた。

その長い沈黙が耐えきれず、映一は首をまわし、肩越しに父を振り返った。瞬間、視線が合い、化粧した顔を見られ、映一は、またあわてて顔を戻した。

きっと父は、烈火のごとく怒りだすにたがいない。

「なんて情けない格好をしてるんだ」となじるにちがいない。

映一はそう思って肩をすぼめた。

ところが父は、なにかを口の中でぼそぼそとつぶや

いただけだった。

「……そうか。そうだったのか……」

映一には、父の言葉がそう聞こえた。

「……え？」

映一がふたたび振り向くと、呆然としたままの後ろ姿で、父が部屋を出て行くところだった。

おやじは、なぜ、なにも言わずに出ていったんだろ

う。

服を着替えながら、映一はずっとそれを考えつづけた。

怒りが大きすぎて、言葉を失ったのか。それとも、息子の姿に、文字通りあきれてものが言えなかったのか。

そうかもしれない。しかし、それだけではない気がする。なんだか父は、一種不思議な驚き方をしていた。

なにか、そこには、複雑な感情の動きがあったような気がするのだ。

もしかすると混乱した父は、階下で心を落ちつかせ、ふたたび上がってくるつもりなのかもしれない。

映一はそう思い、化粧とマニキュアを落とし、部屋を片づけながら、階下の気配をうかがっていた。

と、父の電話の声が聞こえた。

「新興工業の専務を接待することになったんだ。今日

は社へ戻らんから」

会社への連絡だ。

父は背広姿だったから、おそらく営業の途中で家に立ち寄ったのだらう。そして、そこで思わぬものを見た。会社にうそをついてまで家にとどまったのは、やはりこれから、映一に意見しようと思っっているからにちがいがなかった。

あんな姿を目撃されてしまった以上、もう言い訳は

できないだろう。

父に問いたただかれたら、自分には以前からそういう趣味があるのだということを、正直に告白するしかない。

映一は、覚悟を決めて父を待った。

しかし、一時間以上が経過しても、父はなかなか上がってこなかった。

もしかしたら、もうこのまま、父はなにも言う気が

ないのかもしれないと映一は思い始めた。

おそらく父にしても、どう言ったらいいのかわからないのだ。

映一に意見しようと思い、社に戻らず、家にとどまってはみたが、いざ何か言おうとすると、父の「常識」では、こんな「異常」な事態は把握しきれなかった。

しかも、日常的に親密に口をきいているわけでもない息子に対してでは、なおさら、どう切り出していいか

わからない。それで、迷っているうちに、上がってくる機会を逸してしまった。

たぶん、そんなところだろう。

映一にとっては、その方がありがたいと思えた。父にあんなことを知られ、気まずいにはちがいないが、その気まずさは、これまでの父との暮らしの気まずさとそんなに変わるわけでもないのだ。

二年前、母が急死して以来、父と、一人息子の映一

の二人暮らしは、そんな気まずさだけでつづいていた。どうしても避けられない家事などは二人で分担しているのだから、まったく口をきかないわけにはいかないが、そうした、いわば「事務的」なこと以外、ほとんど会話は無い。

だいいち、父は、ウィークデーはたいてい夜中の帰宅だったし、休みの日も接待ゴルフとかに出かけることが多い。だから、話す機会そのものがない。

父は外食がほとんどだったし、映一にしても、食べたいときには、自分の分だけ作って食べていた。

映一はもう大学二年で、学校のことをいちいち親に報告しなければならぬ年でもない。話題だつてないのだ。

そのうえ映一には、父への「あるわだかまり」がある。自分からすすんで父に話しかける気はない。そして、そのわだかまりにしても、いまさらほじくり返し

てあれこれ言い立てるのは、お互いにしんどいだけだ。  
ぎくしやくした父との関係はたしかに気まずくはあ  
ったが、慣れれば、それはそれで、干渉されない気楽  
さでもあった。

もしこのまま、父がなにも言い出せず、先刻のこと  
は「見なかったこと」にしてくれるのだとしたら、そ  
れに越したことはないではないか。

映一が、そんな結論に達しかけた頃だった。

ふたたび階段を昇る足音が聞こえた。

ベッドにもたれ、膝を抱えて座っていた映一は、びくりとそちらを見た。

と、ドアが開き、ポロシャツ姿に着替えた父が現れた。

「いっしょに来てくれ」

父は、映一と視線を合わせず、そう言った。

「どこへ？」

映一が聞くと、父はやつと映一の方をちらりと見て、  
「いいから、とにかく来なさい」とつぶけた。神経質  
そうに目尻を引きつらせたその表情は、高ぶる気持ち  
を必死に押さえているようでもあった。

映一は、——先刻からの気まずさもあり——それに  
反論できず、のっそりと立ち上がった。

2

車は夕暮れの街を抜け、隣の市へとさしかかっていた。  
た。

父は、ただ無言で運転している。

いったい、どこへ行こうっていうんだ？

助手席の映一は父の真意をはかりかね、窓外の商店街の景色を眺めた。

もしかすると、自分は精神病院にでも連れていかれるのかもしれない。

映一はそう思った。

ナイーブなところなどまるでない父が、息子の女装姿を見て、単純に心の病だと思ったとしても不思議で

はない。

病気なら医者に診てもらおう。

父らしい結論ではないか。

医者に異常だと診断される恐怖はあったが、しかし、おそらく精神科の医者の方が、父などよりずっと、こうしたことにデリカシーを持って対応してくれるにちがいないと思い、映一は半ば開き直った。

ところが、車はそうした病院などないだろうと思わ

れる方向に走っていた。

「……？」

父は、相変わらず何も言わずにハンドルを握っている。怒りが激しいのだろう。蒼白な顔色で、なにか、緊張しているようにさえ見える。

映一は、そんな父の横顔をちらりと見て、父と話さなくなってしまうたのはいつ頃からだろうと考えた。

子供の頃は、世間一般の父と息子と同じように会話

していたと思う。たぶん、映一が思春期にさしかかった頃から、会話がなくなっただのだ。

営業課長か何かに昇進した父が不在がちになり、顔を合わす機会が少なくなっただことが最大の原因だった。仕事を理由に帰りが遅くなり、休日にも家にいず、いっしょに遊ぶようなことはおろか、話す機会すらなくなってしまったのだ。

その結果、父と映一の精神的な距離は次第に離れて

いき、映一は母とばかり話すようになった。

時たま父と顔を合わせても、まるで他人のように思えたものだ。

成績もそこそこで、学校で問題を起こすようなこともなかった映一は、父に殴られたり、ひどく叱られたりした経験もない。しかし、だからこそよけいに父との接点がなく、いつも、父がなにを考えているのかわからなかった。

映一の目には、けつきよく、父は、仕事のこと以外  
なにも考えていない、面白味のない男にしか見えなか  
った。

「父さんは、絶対に、他に女の人をつくったりしない  
人だから」

それが、母の口癖だった。

映一もその意見に異を唱えるつもりはないが、逆に、  
外に女でもこしらえるくらいの方が、今の父より、ず

つと人間味があるとすら思えた。

それに、けっして**贗目**（ひいき）ではなく美人の母が、さみしそうにそんなことをつぶやいているところを見ると——映一にはよくわからないことだったが——、父と母の夫婦としての関係もまた、どこか疎遠になっていたにちがいない。

そんなことを感じながら、いつしか映一は、父の存在を疎ましく思うようになっていった。

そして、そんな父へのかすかな反感が決定的になつてしまったのは、二年前、母が死んだ時だった。

その日、近くのスーパーに軽自動車で買い物に行つた母は、抜け道を暴走してきたダンプカーと出会い頭にぶつかり、そのダンプとガードレールの上に車ごと挟まれてしまった。頭を打ち、その上、肋骨が砕けて、うち何本かが内蔵に突き刺さるといふ大けがだった。病院にかつぎ込まれた時には、すでに意識不明の重体

だったという。

その時、父は海外出張に出ていた。取引先の偉い人のお供で、インドネシアの視察に行っていたとかいう話だった。

けっきよく父が帰国したのは、事故から二日後、母が息をひきとったあとだった。

ホテルを当初のところから移動していたせいで、会社からの連絡がなかなかとれなかったことと、飛行機

の便の手配に手間取ったことが原因だと会社の人は言っていたが、それにしても、苦しみながら死んでいった母を目の前で見ている映一には、父が許せない気がした。

もちろん、来月で二十歳になる映一は、その時すでに、思春期の少年ではなかった。

それだけのことでやみくもに父に反抗したりはしなかったが、父に対して強いわだかまりを持ったまま、

二年間、二人暮らしをつづけているのだった。

そしてじつは、映一が本格的に女装を始めたのも母の死がきっかけだった。

女の子になつてみたい。

自分にそういう嗜好があるのは、幼い頃から気づいてはいた。しかし、高校までは、その手段も機会もなかった。

それが、母の葬儀のあと、親戚のおばさんといっし

よに遺品の整理をしている時、ふと思い立って、母の衣服を入れた段ボール箱のいくつかを自分の部屋に運びこんだ。

母への思いから、捨てるに忍びないという心情が強かったからだ、どこかに、これを着てみたいという気持ちがあったことは否めない。

現に、初七日がすみ、親戚などが顔を見せることもなくなるとすぐに、映一は、ベッドの下に隠していた

例の段ボール箱を引っぱり出して、母の下着をつけ、ブラウスとスカートを着た。

初めてブラジャーのホックをとめた時、不覚にも涙が出た。それは、最愛の母を失ったのだという実感が、その時初めてわいてきたからでもあったし、一方で、そんな行為が母への冒瀆ぼうとくだという思いからでもあったが、じつは、幼い頃からずっと心の奥で願っていたことが、初めて実現するのだという興奮のせいでもあつ

たのだ。

その時、鏡の中でなきべそをかいていたのは、どこか死んだ母の面影を残した、映一が想像していた以上の美少女だった。

そして、その美少女に会いたくて、その日から、映一は女装にのめり込んだ。

日中、父はほとんどいないのだから、条件もそろっていった。

母が亡くなつた年は受験もあつたし、毎日というわけではなかつたが、進学してからは友達づきあいもありせず、大学が終わると早々に帰宅し——時には大  
学をさぼって——、女装した。母を失つたさみしさや、  
父とのぎこちない生活の満たされなさもあつて、それ  
だけが映一の唯一の楽しみになつた。

最初は、母の服だけだったが、そのうち、年相応の  
若向きのものがほしくなり、服や化粧品の種類も揃えた。

そのためにバイトもした。学生の気楽さもあって、髪も伸ばした。今では、もともと茶髪気味のストレートヘアが、背中にかかるまでになっている。化粧もずいぶんうまくなった。

まだ女装での外出などしたことはないが、この密やかな、しかしワクワクするような楽しみは、ずっと——少なくとも学生のうちは——、つづけていられるはずだった。

今日、父に目撃されるというようなことさえなければ……。

映一がそんなふうには、この二年間のことを思い出している時、車は、あるマンションの前に停まった。

「ここだ。ついてきなさい」

父が言った。

その部屋は、造りそのものは何の変哲もない2DKだった。ただ、父につづいて部屋に入った瞬間から、映一は強い違和感を感じた。

玄関のたたきに、数足のハイヒールが並んでいたからだ。そればかりでなく、ダイニングキッチンにある小物——そんなに調度があるわけではないが——なども、どう見ても、女性向きのものだった。

いったい、誰の部屋なんだ？

父が、自分で持っていた鍵でドアを開け、何の戸惑いもなく部屋に入ったのを見て、映一は首をひねった。もしかして、親父の……女？

映一は、「浮気などするタイプではない」という父に対する認識が、まちがっていたのかと考えた。

……それにしても、なんで僕をこんなところに？

映一が、ダイニングキッチンにつっ立ったまま、そう思っていると、父が「そこに座って」と言った。

映一がテーブルに着くと、父は、いったん奥の部屋に引っ込んでから、数冊のアルバムを抱えて戻ってきた。

映一の向かいに腰掛けると、父は少しの間、迷っているような表情をしたあと、映一の顔を見つめ、なにかを決意するかのように、そのアルバムを差し出した。父の「開いてみる」という視線を感じ、映一は、その表紙をあけた。

と、そこには、シックなドレス姿の四十年輩の女が立っている写真があった。ページを繰ると、さらにさまざまな服を着たその女の写真がつづいた。

すらりとして、中年向け婦人服のモデルにでもなれそうな美人だったが、カメラに向ける眼差しがどこかぎこちなく、実際のモデルではなさそうだった。とはいえ、けっして水商売ふうでもなく、どちらかといえ、ふつうの中年女性に見えた。

「……誰？」

映一は、アルバムから顔を上げ、自分の疑問を素直に口にした。

父は、視線を泳がせるようにそらし、そして、小さな声で言った。

「私……なんだ」

「……えっ？」

父の言ったことがまるで理解できず、映一は聞き返

した。

「……私も、お前と同じ趣味を持っている。ここは、そのための部屋なんだ」

映一も、その言葉に、さすがに父の言わんとするところがわかり、しかし、だからよけいにそのことが信じられず、あんぐりと口を開けた。

「お前や母さんの前では、そんなことはお首にも出してなかったつもりだ。だから、お前が私の影響を受け

たとは思えんが……、もしかしたら、血のつながりというやかもしれないな」

映一は、驚きから、まだ言葉を発せられず、思わずアルバムの女と目の前の父を何度も見比べた。

父は、少し身をくねらせるような仕草で——むろん、そんな父を見るのは初めてだ——映一から目をそらせ、そのまま目を上げずに言った。

「さつき、お前のあんな姿を見てずいぶん驚いたんだ。

しかし、同じことをしている私にそれをとがめ立てすることはできない。かといって、見てしまった以上、あのままほっておくわけにもいかないだろう。ずいぶん迷ったが、それならいっそ、私のこともすべてさらけ出してしまった方がいいと思った」

映一は、まだ驚いた表情のままだったが、その言葉にゆっくりとうなずいた。

「それに……、ちよつと、考えもあつて」

「考え？」

映一が聞くと、父はしばらく迷っているようだったが、「ちよつと待ってて」と、なぜかまた奥の部屋に入った。

取り残された映一は、平凡を絵に描いたような面白みのない男だと思っていた父にこんな秘密があったことに、しばらく呆然としていた。

やがて、最初の驚きから覚めると、映一は、あらた

めてアルバムに見入り、ページを繰った。

そして、そこで、もうひとつ驚く発見をした。

映一はけっしてうぬぼれでなく、自分の女装姿はけっこういい線をいっていると思っている。女物の服を着、メイクすると、女に見えるというだけでなく、同じ年頃の本物の女の子の中にもいないほどキュートな美人になれた。

そしてそれは、母の美貌を受け継いだおかげだと思

っていた。

ところが、その写真を見て、自分は、母より、むしろ父に似ているのだということに気がついたのだ。

いつも鏡の中に見ている自分の女装姿と、父のそれとは、年齢の差こそあれ、瓜二つと言っていていいほどに似ていた。映一が、女装したまま年をとったら、こうなるだろうと思える姿なのだ。

そのことは、映一に、驚きと同時に、ここ数年来持

ったことのない父に対する親近感のようなものを感じさせた。何年間も切れていた父との関係が、ここでふたたび結びついたような、そんな感じがあった。

ふつうに考えれば、父親が女装趣味を持っているなど、子供にとってはいやなことにはちがいない。しかし、映一は——まあ、自分も同じことをやっているのだということはあったが——、そのこと自体にも、嫌悪感  
は抱かなかつた。

おそらくそれは、自分とそっくりなその写真の中の「女」が、きわめて自然な感じで、しかも、上品な美人だからだ。映一は、それが妙にうれしかったのだ。

そんな思いで、何度もそのアルバムを見返している  
と……

目の前にその「美人」が立っていた。

「……え？」

また驚きの声をあげた映一に対して、急いで着替え

と化粧をしてきたらしい父は、恥ずかしそうに照れた。「こんな格好、一生見せることないと思ってたんだけど、こうなったら、全部さらけ出しちゃった方がいいと思つて。……いや？」

ちよつと不安そうにそうつけ加えた父に対し、映一は、写真以上に自然で美しいその姿に見とれながら、首を横に振った。

それに安心したらしく、ベージュのワンピースを着

た父は、また、映一の向かいに腰掛けた。

「さつきはほんとに驚いたのよ」

父は、いつの間にか女言葉になっている。しかも、それが少しも不自然ではない。

「すごく驚いたけど、でも、ちよっとうれしかったの。だって、映一、すごく美人でかわいかったから」

父の言葉に、今度は映一が照れた。

しかし、父も自分と同じことを感じていたのだと思

うと、父に対する親近感がますます増していくように  
思えた。

と、父が、映一の目をちよつと上目づかいでのぞき  
込むようにして、言った。

「ねえ、もしよかったら、映一も、してみない？」

「え？」

「女装。もう着なくなってしまった若向きの服もたく  
さんあるし。あたしがお化粧してあげる」

そんなことを言いだした父に、映一はひどく戸惑ったが、その言葉のもつ甘い誘惑には勝てず、一瞬後うなずいていた。

父のメイクは、驚くほどうまかった。

色白の映一の肌を生かし、ファンデーションもシヤドーも薄目だったにもかかわらず、映一がふだんしているのとはくらべものにならないほど女らしい魅力

を、映一の顔から引き出してきてくれた。鏡の中で変身していく自分を見ながら、その美しさ、愛らしさに、映一自身がため息をついた。

化粧筆を動かしながら父が話してくれたところによると、父も学生時代から女装していたらしい。社会人になってからもつづけていたが、母と見合いし、結婚して十数年は我慢していたのだという。しかし、八年前くらいから、また始めるようになった。ちょうど、

父が不在がちになった時期である。

「なんだ、仕事が忙しかったんじゃないの」

映一がちよつと非難するように言うと、父は、けつして言い訳がましい口調ではなく、こう答えた。

「もちろんそれが大きかったのよ。でも、だからこそ好きなことをする時間がほしくなるってことも、あるでしょ」

社会に出ていない映一にはよくわからなかったが、

仕事のプレッシャーが大きくなれば、そこからいつと  
き逃れるために密かな楽しみの時間を持ちたいと思う  
ことはあるだろう。ふつうのサラリーマンは、ゴルフ  
だとか釣りだとかにそれを求める。それが、父の場合、  
たまたま女装だった。そう考えれば、さほど奇妙なこ  
とではない気もした。

「さあ、できたわ。これを着けて」

メイクを終えると、父はブラとショーツ、それにキ

ヤミソールを出してくれた。すべて、映一が着けたことのないシルク製だった。

映一が下着をつけている間、父はクローゼットから服を選んでいた。

「どれを着たい？」

「うわ、かわいい」

父が取り出した三着の中から、映一は迷わず白いパーティドレスを選んだ。

これも、映一が着たことのない——だから憧れていた——レースやラッフルのいっぱいついたものだ。

「だと思った。その服なら、イヤリングとネックレスは……」

映一がそのドレスを着ていると、父は浮き浮きした声でアクセサリを選んだ。

それを映一の首と耳につけてくれたあと、父は映一を姿見の前に導いた。

鏡を見て、映一は息を呑んだ。

すらりとした脚の膝のあたりまで、幾重にも重なったペチコートに押し上げられ、スカートがふわりと広がっている。そのスカートとパッドを入れた胸の間にあって、ウエストは今にも折れそうなほどくびれて見える。胸の上からは裏地がなく、細かいレースの中にか細い肩がほの白く見える。両サイドの髪を三つ編みにして後ろにまわし、白いリボンで結わえたヘアスタ

イル——メイクのあと、父が結ってくれたのだ——も、そのドレスとぴったりに合っていた。

ふだんしているカジュアル中心の女装にはない、ゴージャスで、しかもキュートな魅力がそこにはあった。

初めてのパーティに招かれ、胸ときめかす美少女。

——そんな感じだった。

こんな服が似合うなんて、男にしては色白で、しかも小柄で細身の体のおかげだな。

映一はそう思った。そして、それは、まぎれもなく父譲りの体質だった。

「ねえ、名前、あるんでしょ？」

後ろに立って、うれしそうな笑顔で姿見を見ていた父が聞いた。

「……？」

「女の子になった時の名前、つけてるわよね」

「え？ うん、『はゆみ』っていうの」

映一は、照れながら言った。

「はゆみ……？」

「映一の映は『はえる』って読むでしょ。それに『美しい』と書いて映美」

「美しく映える。ぴったりの名ね」

「父さ……」

映一は言いかけて、ちよつと迷ってから言い直した。

「……ママは、なんていうの？」

「え、ママ？ ……ふふ、志保っていうのよ」

父も照れくさそうに言ってから、ちよつと真顔になつて鏡の中の映一を見た。

「ねえ、映美、ひとつ提案があるんだけど」

父に「映美」と呼ばれ、胸がきゅんとしめつけられるような気がした。人からその名で呼ばれたのは、初めてだった。

映一は、さらに恥ずかしそうな笑顔で「なあに？」

と聞いた。

「これでもう、お互い秘密にしなければいけないこと  
はないでしょ。だから、これから、女どうしとして暮  
らさない？」

「……え？」

映一は振り返り、今度は父の顔を直接に見た。

「じつはね、ここ、引き払わなければいけない事情が  
できてしまつて、ちよつと困つてたの。ちようどいい

つて言うのも変だけど、あたしが家で女装することを映美が許してくれるなら、これからはいっしょにできるかなって。そしたら、いろいろ教えてあげられることもあると思うの」

父の思わぬ提案に、また映一は驚いたが、もう一度、鏡を振り返り、その中にたたずむ美しく変身した父と自分……母と娘の姿を見つめ、うなずいた。

その日、父と映一は、夜遅くまで、かわるがわるにさまざまな服を着て女装を楽しみ、そして、その姿のまま、車に乗って帰った。

父も、女装外出の経験はあまりないらしく、人通りの多い繁華街での信号待ちなど、ひどく緊張していた。しかし、ふつうの人々が暮らす街のただ中で、二人だけが秘密を共有しているという「共犯意識」が、映一と父の精神的なつながりをさらに強めた。

人通りの少なくなつた自宅近くの新興住宅地にさしかかり、やっとハンドルさばきの落ち着いた父に、映一は、先刻から気になつていたことをきいた。

「もしかして、今日、仕事の途中で家へ寄つて話そうとしていたことつて、このことなの？」

「まさか。だって、あの時はまだ、映美にこんな趣味があるなんて知らなかつたのよ。そんなこと、言えるわけがないじゃない。じつはもうひとつ、困っている

ことがあって、映美にお願いしたいことがあったの」

「なに？」

「それは……また今度にするわ。まだ、だいじょうぶだと思ふし、あたしと映美の新しい暮らしが落ち着いてからの方がいいと思うから」

父が言いかけたことが気にはなつたが、映一は、明日から始まる、堂々と女の子として暮らせる日々に胸がいっぱいで、それ以上の詮索はしなかつた。

3

「えつと……鍋から取り出したスパゲティの水を切り、オリーブオイルを軽くからませたあと、深めの皿に盛りつけ、先刻つくったスープをかけていただきます：

：つて」

大きな花柄がプリントされた綿のオーブントップを着た映美——いや、映一は、ダイニングテーブルの上  
に開いたレシピ本をのぞき込みながら言った。

それにうなずきながら、ざるの中で湯気を立てているスパゲティを一本つまんで口に入れた志保——やわらかな胸のふくらみを見せるモスグリーンのサマーニ  
ットとエプロン姿は、どう見ても上品なミセスだが、

こちらにもまた実体は男。映一の実父、信一である――  
は、ちよつと首を傾げたあと、スパゲティをもう一本  
とつて、映一の方にさしだした。

「ねえ、ゆで加減、こんなでいいかしら？」

いたずらっぽい顔で見返した映一は、きれいにマニ  
キュアされた父の指先をくわえるようにして、それを  
食べ、ピンクの口紅の塗られた唇をすぼめて、口先で  
噛んだ。

「……うん、おいし。このくらいアルデンテの方が、あたし、好きよ」

「そうよね、やっぱり」

父がそう言いながらスパゲティを盛ると、グリルから鍋をとった映一は、その二つの皿にスープをかけた。

「でも、このスープ、けっこうカロリーありそう。太らないかな？」

「だいじよぶよ。映美は体質もママ似なんだから」

食器やつけ合わせの皿などを並べ、テーブルの用意をしながら、父はそう言つてウインクしてみせた。

映一が、女装しているところを父に目撃され、さらに、なんと父も同じ趣味を持っていることを告白された日から、すでに三週間がたっていた。

今、映一と父は、家の中では女どうし——「映美」と「ママ」——として暮らしている。

それは、何かの事情で女装に使っていたマンションを引き払わなければならなくなった父からの提案だったのだが、映一にとっても、誰の目もはばからず女装していられるというのは願ってもないことだったので、すぐに同意した。

父は、あのあと、さっそく、マンションに置いてあった自分の女装用品を家に運び込み、会社から帰ったあとや休日は、女装して過ごすようになった。映一も

また——大学が夏休みに入っていることもあり——、バイトなどで外出するとき以外は、女の子になって暮らしていた。

最初こそ照れもあったが、父がじつに巧みに、自然な女言葉と仕草で接してきたので、映一もすぐにそれに慣れた。

お互いを「ママ」「映美」と呼び合う二人の姿は、仲のよい美人母娘そのものだった。

以前は、仕事からの帰りが遅かった父も、早く帰宅することが多くなり、そんなときは、こんなふうには、二人、エプロン姿で台所に立ったりもするのだ。

もちろん常識的に考えれば、とんでもない父子ということになるのだろうが、父にとっても、そして映一にとっても、「女になりたい」という気持ちは、そんな常識などでは計り知れない心理の深みからわき上がってくるもの——かけがえのないファンタジーとでも

言えばいいのか——だった。だから、二人の間で「常識はずれのことをしてもいいんだ」という了解さえできてしまえば、ことは簡単だった。その結果、二人はこの上なくファンタスティックな生活を手に入れたというわけである。

そして、その一点において、映一と父は誰よりもわかり合うことができた。

本来なら、他人には絶対知られたくない部分——肉

親にはもつと知られたくない部分かもしれない——  
を、共有し理解し合える肉親がそばにいるのだ。これ  
ほど幸せなことがあるだろうか。

さらに、「父と息子」である間はちぐはぐだった関  
係が、「母と娘」を演じ始めたとたん、なんの抵抗も  
なくお互いの気持ち素直に表せるようになってい  
た。

それは、一方では、こういうことなのかもしれない。

そんな身近な人間関係について、男はどうしても不器用になりがちだ。特に今の日本では、「家」という場で、男は脇役でしかありえない。昔のように、家長や長男として堂々と振る舞うことなどもちろんできな  
いし、かといって、家族に対する愛情をストレートに示すことも、どこか面映ゆかったりする。母という主役を突然欠いてしまった映一の家の場合にはなおさらだった。脇役どうし、お互いの領域に踏み込むすべもな

く、不器用に日々を送ってきたのだ。それが、映一と父の間がしっくりいかなかった——少なくとも日常的な部分での——原因だった。

その点、女という立場でなら、家の中で主役として振る舞えた。面と向かって、お互い思っていることを言い合っても、相手のプライドを傷つけるのではないか——あるいは自分のプライドが傷くのではないか——という、くだらない心配をしなくてすむのだ。

映一には、そのことが、女の子として暮らせるという以上にうれしいことに思えた。

二年前、母が急死して以来、忘れていた家族のぬくもりのようなものを取り戻せた気もしていたのだ。

それなのに……

「えっ、男の人を同居させる!？」

最後のスパゲティを食べ終わった映一は、フオーク

を置くのも忘れ、魅力的な大きな瞳をさらに見開いて聞き返した。

「……ええ、だめかしら？」

父は、まだ半分以上残っているスパゲティの皿をフオークの先でかき回すようにして、上目づかいに映一の顔をうかがった。

「だって、そんなあ……」

「仕事でずっとお世話になってきた、あたしがいちば

ん信頼している人なの。その人が困っているんだもの。放っておくわけにいかないじゃない」

「母と娘」としての暮らしが始まって三週間たった今、父はまた、とんでもないことを言い出したのである。

映一は、まだ驚いた表情のまま、三週間前の父の言葉を思い出していた。

あの日、父はたしかに「もうひとつお願いがある」

と言っていた。だから、今思いついたことではないの  
だろう。この間ずっと考えていて、映一との新しい関  
係がうまくいっていることに確信を得て、持ち出して  
きたのだ。

しかし、だからと言って——いや、だからこそよけ  
いに——第三者を同居させるなど、映一としては承伏  
できることではなかった。

「だって、それって、もうこんなふうにしてられなく

なるってことでしょ」

むき出しの白い肩から落ちかけたストラップを戻しながら映一が言うと、父は、また映一の顔をうかがうようにして言った。

「ううん、そうじゃないの。その人、あたしが女装すること、知ってるのよ。仕事のことだけじゃなく、個人的な相談にもいろいろのってもらってたから。だから、映美のことも話してあるの」

父が言っている「映美のこと」というのは、女装のことだろう。父だけが知っていると思っていた自分の秘密を、他の人間にしゃべられていたことに、映一は少なからず鼻白む思いがして、ふくれた。

「あたしより十歳も年上なんだけど、そういうことに対して偏見なんて持ってない人だから、映美は今のままにしていいのよ。それにね、この時期さえ乗り切れば、身を隠してる必要なんてないんだから。たぶん

一ヶ月か二ヶ月だけ……」

父が持ち出したのは、こういう話だった。

その男は、機械メーカーの営業である父が、古くから上得意にしている貿易会社の社長なのだという。彼は業界切つてのやり手で、裸一貫から会社を興し、その分野では大手商社にも負けない輸出を手がけている。会社も、二十年の間に飛躍的に成長した。

ところが、バブル期に多角化展開を任せていた専務が、ご多分に漏れず不動産取引に手を出し、大きな焦げつきをつくってしまった。いくつかの銀行から融資を受け、なんとかしのいできたが、うち続く不況とメインバンクの貸し渋りから、最近では、運転資金の調達もままならない。まだ担保として手をつけてはいない彼自身の個人資産が残っているから、どうしようもない窮状というわけではなかったが、今度は、その経

営危機を理由に、一部株主をバックにした何人かの取締役が反乱を起こした。彼に経営権の移譲を迫っているのだ。反乱者たちの多数派工作が進み、取締役会を開けば、それが決議されることは、もはやまちがいないところまで来ているという。

しかし、じつは彼には、大逆転の切り札がある。今、中国の企業との間に大きな契約の話が進んでいるのだ。それがまともなれば、危機から脱出できるはずだ。

社内抗争の相手方に気取られず密かに契約を進めながら、その締結まで取締役会の招集を引き延ばさなければならぬ。

けつきよく、今のところ、株式の過半数と代表権を握っている彼が、しばらく身を隠すしか手はない。しかし、自分の家はもちろん、ホテルなどに隠れてもすぐ見つかってしまうだろう。そこで、映一の父のもとに身を潜めたいというのだ。

まだ学生である映一には実感としてよくわからない話だし、なんだか胡散臭いうさんくさことのようにも思えた。

その上、心おきなく女装のできる今の暮らしに、その男が唐突に入ってきて来るといっているのである。

父にとってはなんでも相談でき信頼できる相手かもしれないが、映一にとっては、赤の他人である。父以外の人間に女装姿を見られることなど耐えられない。ましてや、いっしょに生活するなどもつてのほかだ。

「そんなの、絶対いやよ」

「そんなこと言わないで。お世話になりつづけた恩返しをがしたいの」

映一に対して、父は懇願した。

「もし、その人がどうしても来るって言うなら、あたし、女装やめるわ」

映一は、そう言って、スパゲティの皿を持って立ち

上がると、父にそれ以上言わせまいとでもするようになり、シンクの水道を勢いよく出した。

しかし、父はけつきよく、映一の反対を押し切り、その男を家に招き入れた。

そして、それでも映一は——その言葉とは裏腹に——、女装をやめなかった。

もちろん、せっかく手に入れた「夢の暮らし」を手

放したくはなかったからだ、それ以上に、女装をやめることは、やつとうまくいきはじめた父との関係を、壊してしまうことになりそうな気がしたからだだった。

けつきよく、映一には、「一ヶ月か二ヶ月のこと」という父の言葉を信じ、その男を無視するというかたちで黙認するしか方法はなかったのである。

土曜の深夜、人目を避けるようにしてやってきたその男を、女装したままの父は、不思議に照れもせず、

「佐橋さんよ」と紹介した。

「ほお、聞いてたとおりに、かわいい娘さんだね」と、ごく自然な感じで穏やかな笑顔を向けてきた佐橋に、映一はあいさつすらしなかつた。

しかし、一瞬だけ、佐橋の顔に見入ってしまったのも、また事実だった。

それは、佐橋が、想像していたのとまるでちがった男だったせいだ。

映一は、佐橋のことを、どうせ脂ぎった中小企業の親父風なのだろうと思っていたのだが、実際には、むしろ大学教授といった風貌の教養と気品の漂う人物だったのだ。

それに、その表情や立ち居振る舞いも、彼が陥っている境遇を感じさせないはつらつとしたものだった。

父より十歳年上ということは、五十代後半のはずである。それなのに、その顔も、そして大柄なのに贅肉

のないその体軀も、男姿の時の父の年齢とさほど変わらなく見える。いや、張りのある筋肉と精悍なぶんだけ、若く見えるといった感じがする。

映一はその顔に見入ったあと、そんな自分に気づき、なんだか妙に恥ずかしくなつて、あわてて自分の部屋に引っ込んだのだった。

佐橋が来たことで、父と映一の関係は、また大きく

変化するかに思えた。だが、実際のところ、そのあと  
も、映一の暮らしがそんなに変わったわけではなかつ  
た。

映一が佐橋のことを気にすまいと思っただからだが、  
それ以上に佐橋の方も気を使っているらしく、映一と  
顔を合わせないようにしていたからだ。

父はウィークデーは会社に行くから、日中は、夏休  
み中の映一と佐橋だけが家にいることになる。だが、

そんな時も、佐橋は彼の部屋としてあてがわれた書斎からほとんど出てこなかった。時折、携帯電話を使い、英語や中国語で、なにかを指示しているらしい声が漏れ聞こえてくることで、やっとそこにいることを思い出すというほどだった。

それは、食事の時などでも変わらない。佐橋のぶんは父が用意していくらしく、朝食も昼食も書斎ですませている。夕食にも同席することはなかった。

だから、映一も、父との「女どうし」の暮らしを以前と同じようにつづけていられた。

父もまた、映一の機嫌を損ねたくなかったのだらう。映一の前では、佐橋のことは口にせず、まるでいないものとして振る舞っていた。

そんな日々が続いた八月中旬のある夜だった。

熱帯夜のせいでクーラーの効きが悪く、寝汗をかい

て目覚めた映一は、自分の部屋から階下に降りた。

冷蔵庫のミネラルウォーターを飲もうとキッチンに入ってくると、その時、どこからか、聞き慣れない声  
がした。

「……ん？」

とぎれとぎれに、あえぐような甲高い声――

最初は「なんだろう？」という思いで、そして、途中からはある想像につき動かされて、動悸がだんだん

速くなるのを覚えながら映一は廊下を声の方に向かった。

思ったとおり、声は、父がいつも床をのべ寝室として使っている居間から聞こえていた。

その障子の前まで行くと、声は、さらにはつきりと耳に入ってきた。

「あッ、：：あー、パパあ」

映一は、激しく動揺し、迷いながらも、身をかがめ、

障子の下段のガラス張りになっている部分に顔を近づけた。

と、スモールランプだけの薄暗闇の中で、ふたつの人影がもつれ合っていた。

「あーん、パパ、だめよ。志保、もう、がまんできない」

頭を奥にして、布団の上で少し身を起こした大きな影に、すがりつくように細身の白い影がまとわる。

タオルケツトに隠れた二人の下半身は、複雑に絡み合っているようだ。

「ほんとに、しょうのない子だなあ。毎晩、おねだりばかりして。で、志保は、何がしてほしいのかな？」

「うーん、わかってるくせに」

「……ふふ」

と、大きな影は、タオルケツトを跳ね上げ、布団の上を立て膝になった。そして、ブラジャーだけを身に

つけた白い影の腰のあたりを引き寄せ、ぐいと持ち上げ  
げる。

白い影は身をくねらせながら尻をつきだし向きを変  
えた。顔をこちらに向けて四つん這いになったのだ。

映一は、その父の顔に、あわてて身を隠そうとした。  
しかし、父の視線は、すでに虚ろで、あらぬ方向を見  
ている。

「……そんな、……ああん、だめ」

大きな影——佐橋が、父の後ろの部分に触りながら  
じらしているようだ。

「……んもう、早くう……入れて」

映一がこれまで聞いたこともない甘えた鼻声で、父  
は言った。

その「おねだり」に、佐橋はやっと、全身で父の尻  
を突いた。

「あっ、ああーっ」

父は、目を細め、口をゆがめ、苦悶の表情を浮かべて、猫が伸びをするように背中を大きく反らせた。しかしそれが、すぐ、恍惚とした愉悦の表情に変わる。

「……ああ、大っきい」

佐橋が腰を前後に動かし始めると、それに合わせるように、父は体を大きく揺らした。

「あ……、あ……、い、いい……」

しばらくそんな動きをつづけたあと、佐橋は、いつ

たん父の背中に覆い被さり、その胸に腕をまわすと、いきなり上体を抱き起こした。

布団の上に座った佐橋の膝の上に、結合したまま腰掛けるようなかたちになった父は、先刻よりさらに体全体をくねらせ、佐橋が腰を浮かせるたびにのけぞった。

「あ、……あ、……あーっ」

と、佐橋が、そんな父の耳元に口を寄せつぶやいた。

「そんなに大きな声を出すと、二階の映美ちゃんに聞こえちゃうぞ」

「んーん、だってえ……、パパのが、すごいから」

「ふふ、じゃ、もう、よそうか？」

「ばか。いじわる。……もつと、……もつと来て」

父は、あえぎながら体をひねり、腕を佐橋の首にまわして、せがんだ。

腰を激しく突き上げながら、佐橋も首をひねって、

口を父の首筋に這わせていき、やがてその唇をとらえた。

二人は体を揺すりながら、激しいキスを交わしあつた。

「……ああ、パパのが、あたしの中で……。あたし、  
パパの……、パパの女」

「そう。お前は女。私ひとりの女だ。もっと、欲しいか？」

「……もつと、……もつと、志保のこと……めちやく  
ちやにして」

「ようし」

佐橋は後ろに手をついて、これまで以上に大きく体  
全体をのけぞらせるようにして、父の体を突き上げた。

「あ、あーっ」

そのせいで腕も唇もはずれ、父の体は、佐橋の体の  
上で一点だけで結ばれて、その動きのままに波打った。

「……あー、イキそうだよ」

「あたしも……」

佐橋がさらに大きく腰を浮かすと、父は、まるでスローモーションで踊ってでもいるかのように、なにものもない中空に腕を差し上げ、上体を弓なりにそらせた。

「……あーっ」

ロングヘアのウィッグの髪が幾すじか、ほの白い首からブラジャーの胸へと、汗の流れに沿って貼りつい

ていた。

その夜、映一は、ほとんど眠ることができなかつた。

眠ろうとして目を閉じてても、薄暗闇の中で妖しく輝いて揺れていた父の白い肌が、そして、惚けたようにうつろなその顔が、浮かんできて離れないのだ。

もちろん、映一とて、もう子どもではない。じつのところ、父と佐橋がそんな関係にあるのではないかと、

かなり確実なものとして疑ってはいた。父が、佐橋の前でも女装姿のまま平然としていられるのは、そうとでも考えなければ、納得できないことだ。

しかし、そんなことを考えるのもいやで、もちろん問いただす気にもならず、それもあつて佐橋のことを無視していたのである。

だが、あんな生々しい「現場」を見てしまった以上、いやがうえにも詮索は広がっていく。

おそらく、父と佐橋は、ずっと以前からああいう関係をつづけているのだらう。もしかすると、いったんは女装をやめていたという父が、ふたたびするようになったきっかけも、佐橋と知り合ったことなのかもしれない。

それに、あのマンション。

父の収入では、この家のローンと、あのマンションの部屋代の両方を賄うのはむずかしいはずだ。おそらく

くあの部屋は、佐橋のものだったのだ。父が秘かに女装する場所という以上に、父とそういうことをするために、佐橋が用意した部屋なのである。父が言っていた、あの部屋を引き払わなければならなくなった「事情」というのも、佐橋の会社の経営難を考え合わせれば説明がつく。

しかし、だとすると、自分は体よくダシに使われていたということになる。

佐橋に「女」として会えなくなりそうな父が、映一の女装癖を知ったのを幸いに、家で女装していられる環境をつくり、その上で佐橋を迎え入れた。そう考えられなくはないのだ。いや、そう考えるのが順当だろう。

会社のこともあり、いずれにしても、父は、佐橋を我が家にかくまうつもりだったのかもしれない。しかし、だとしても、そのままでは、映一の手前、佐橋に

対して女として接することなどできないだろう。だから、あの時点で、映一の女装癖を知ったことは、父にとつて、まさに渡りに船だったにちがいないのだ。

女装で暮らせるうれしさに、これまでうがった考え方をしてこなかったが、わが子に女装をすすめる親など——たとえば自分にその癖へきがあるとしても——、現実離れしすぎているというものだ。

映一は、朝までベッドでそんなことを考えつづけて

いた。

しかし、それだけならまだ、父と決定的に対立しよ  
うなどという気にはならなかったはずだ。

たとえば、父にどんな思惑があるにせよ、今の暮らし  
に、映一自身も、じゅうぶんに「利益」を得ているの  
だから。

せっかく手に入れたこの夢のような暮らしと父との  
良好な関係を、すべてぶち壊してしまうのは、いかに

ももつたいない気がした。

ところが翌日、一見なんでもないようでありながら、  
映一にとってさらに衝撃的な出来事があったのだ。

4

朝方になって寝ついたせいで、映一が、その日起き出してきたのは、昼近くだった。

映一は、ぼんやりした頭で階下のバスルームに行き、

シャワーを浴びた。

そのあと、いつものように、用意しておいたパッド入りブラとショーツをつけ、エスニック柄のワンピースを着た。

そして、洗面台の前で、ドライヤーを使い、濡れた髪を乾かしている時だった。

突然、背後のドアが開いたのだ。

父は会社に行っているはずだから、入ってくる人物

は一人しかいない。

案の定、ドアの向こうから現れたのは、佐橋だった。おそらくはトイレに用足しに来たにちがいない。

そこに映一がいたことに、佐橋も驚いたようだった。鏡越しにはつとした顔を見せた後、あわてて「あ、おはよう」と言った。

映一は鏡に向かって軽く会釈しただけで、無視しようとしたが、それ以上に、佐橋の顔をまともに見るこ

とができず目を伏せた。昨夜の父と佐橋の嬌態きょうたいを、頭の中でまざまざと思い起こしてしまったせいだ。

視線をそらせたまま、早く行ってくれないかと思っ  
ていると、いったんはトイレに入りかけた佐橋が、不  
意にまた映一の方を振り返った。そして、そのまま、  
映一の姿をしばらく見ていた。

映一は、それが耐えられなくなり、「あの、なに  
か？」と聞いた。

「あ、いや。その服、よく似合ってるから。志保……いや、ママ……というか、父さんからもらったんだろ」  
なぜか、佐橋も少しどぎまぎしているようだった。

「……ええ」

映一は、小さな声でうなずいた。たしかにそのワンピースは、最近父からもらったものだった。

「ちよつとなつかしくてさ。それ、バリ島で買ったんだ」

佐橋は、まるで言い訳でもするようにならうつけ加え、  
トイレに入った。

それだけだった。

しかし映一は、その言葉に、昨夜よりもっと強いシ  
ョックを受けていた。

自分の部屋に戻った後、あわててそのワンピースを  
脱ぎ捨て、下着姿のまま、呆然とたたずんでいた。

佐橋が言った言葉から考えれば、この服は、父と佐橋がいつしよにいる時に買ったにちがいない。そして、その場所は、バリだった。

父はこれまで、仕事で何度か海外出張している。しかし、そのほとんどは、アメリカかヨーロッパだったはずだ。映一が子供の頃、一家で香港旅行をしたことはあるが、それ以外には、父は東南アジアに行っていない。ただ一度だけをのぞいて。

そしてその一度とは、二年前、母が交通事故で急死した時だ。

内臓破裂という大けがを負い、病院の集中治療室でまる一日苦しみなながら母が逝った後、二日もたつてから、父はやつと帰国した。

取引先の社長とインドネシアに視察に行つて、向こうでホテルを移動したためなかなか連絡が取れなかった、と、会社からは聞かされた。

それがなにを意味するのか、さして考える必要もないだろう。

母が地獄の苦しみを味わい死の淵をさまよっているまさにそのさなかに、あの父は、バリ島のリゾートホテルで「女」になって、佐橋と昨夜のように……そう、昨夜のように快樂の澱みの中を漂っていたのだ。

許せない！

映一はそう思った。いや、思ったというより、体全

体でそう感じた。

二年前、集中治療室で、苦しそうに顔をゆがめ息をひきとった母の姿が、その脳裏にまざまざと浮かんでいた。

父との関係を修復しようとし、そうできたことに喜びを見いだしていた最近の数週間が、急に馬鹿馬鹿しいものに思えた。

その前の二年間、明確な形を持たないまま、ずっと

持ち続けてきた父への「わだかまり」が、急激に凶暴な「悪意」となって映一の中に像を結んだ。

復讐するんだ。

：：父にとって最も打撃となることをして、母と同じ思いを味わわせてやるのだ。地獄に落としてやるのだ。

：：母さん、僕が、父さんのひどい裏切りの仇をとるからね。

：：でも、どうすればいいんだ。どうすれば、父を苦しめることができるんだ。

映一は、そこに立ち尽くしたまま、考えつづけた。

そして、しばらく後、唐突に机の前に座ると、ミラースタンドを取り出し、そこに映った自分の顔を見つめながら、ルーージュを塗り始めた。

持っているうちで最も赤い、血の色のルーージュを。

選んだ服は、ルージュと同じ真っ赤なスリッパドレスだった。細いストラップの横に、ブラのストラップがのぞき、レースが縫いつけられたカップの部分は、シリコンパッドの形のよい胸を浮き上がらせている。

細くしまったアンダーバストからヒップラインへと降りるスカート部分は、膝上二十センチで、裾にシースルーのレースがあしらってある。そのレースの間から肉感的な太股がのぞき、さらに、すらりとした膝とふ

くらはぎが伸びていた。

映一は、自分の脚の線が、男には珍しいほど——いや、並の女にもいないほどきれいだということを、よく心得ていた。

つや出し用のオイリーなスプレーで髪をブラッシングしたあと、映一は、その美しい脚をすりあわせるようにして階段を降りた。そして、まず台所へ行った。

そこで、紅茶を煎れ、ふたつのティーカップをトレ

イにのせると、書斎へと向かったのだ。

「……はい」

ノックすると、中から、すこし戸惑ったような佐橋の  
声が聞こえた。

「おじさま、入っていいかしら？」

「……え？ あ、……ああ」

佐橋の声に、映一はドアを開けると、コケティッシュな笑顔を  
つくって声をかけた。

「おじさま、テーブルブレイクなんて、いかが？」

佐橋は、いまだ戸惑った表情で、また、「ああ」と言った。

映一の着ている服にも、「おじさま」という言い方にも面食らったのだろう。

映一はかまわず中に入り、佐橋のすわるデスクにカ  
ップを置くと、自分は佐橋の横に立ったまま、ソーサ  
ーを手にした。

「書齋なんて言ってるけど、物置みたいに狭い部屋でしよ。ソファも置けないのよ。おじさま、こんなお部屋に閉じこもっていて、むしゃくしゃしたりしないの？」

狭いことはたしかだったが、書棚の前にはスツールもあるし、けっして座る場所がないわけではない。映一が立ったままではいるのは、その方が、自分の脚が、佐橋の目により触れることになると思っただからだ。

「うむ、たしかに、こんな暮らしにもそろそろ飽きてきたけどね。もうしばらくは、しかたがないな」

戸惑いから、笑顔に変わり、佐橋が言った。それは、映一のことをけっして悪く思っていない表情だった。そしてさらに、その眼差しがときどき揺れて、自分の太股あたりをさまようのを、映一は見逃していなかった。

「おじさま、ひとつ、聞いてもいいかしら？」

映一は、紅茶をひとくち飲んだ後、話の方向を変えた。

「なんだい？」

「おじさまは、あたしやママみたいな男、気味悪いかって思わないの？」

「気味悪い？ ふふ、そんなことは思わないよ。むしろ、すばらしいことだと思ってるんだ。いや、性革命の理解者を気取るつもりはないがね。じつは、私自身

がどうしたわけか、女になりきろうとしている男に、魅力を感じてしまふたちなんだ。そんな人を、なによりにかわいらしいと思うんだ。まあ、そんなだから、未だに独身なんだがね」

「へえ、奥様、いらしやらないの」

「ああ、一度はまともな結婚もしたんだがね。けっきよく長続きはしなかった。実物の女には、精神的な深みというか、それ以上の魅力を感じないんだ。恋とか、

愛とか、そんなことは、できるだけ、現実の臭いがしない方がいい」

「ふうん。：：でも、ほんものの女の子って、それだけでじゅうぶん魅力的でしょ。あたしなんて、女の子を見てると、どうしてもかなわなくなって悲しくなるもの」

映一は、そう言いながら、デスクにティーカップを置き、そこに軽く腰をのせるようにしてもたれ掛かつ

た。スカートの裾が、さらに上にあがり、スキヤンテ  
イのラインぎりぎりまで太股があらわになっっている。

「そんなことはないよ。映美ちゃんは女の子そのもの  
だもの。そんな男をたくさん見てきた私だって、街で  
出会ったとしたら、まず男の子だとは気づかないな。

女の子に負けてるどころか、どんな女の子もかなわな  
いほどきれいで、魅力的だよ」

「ほんとに？」

「ああ」

「うれしい」

映一は、いかにもうれしそうに、スキップするよう  
な足どりで、デスクを二三歩離れた。

そして、そこで、なにかを思いついたようにくるり  
と振り返った。

「ねえ、おじさま」

「ん？」

「じゃあ、ママとあたし、どっちがきれい？」

「……え？」

「女として、どっちが魅力的？」

「なんで、そんなことをきくんかい？」

佐橋は、ちよつと戸惑ったようにきいた。

「知りたいの。おじさまにとって、ママとあたしのど  
つちが魅力的かって」

「でも、どうして……」

佐橋がふたたび聞き返すのと同じタイミングで、映一は、すんと前に落ちるように床にひざをついた。今度は佐橋を下から見上げるような位置関係になった。

「どうしても……」

大きな瞳で見上げられ、佐橋は、あきらかに狼狽していた。

「おじさまは、どつちが好き？」

映一は立て膝のまま、さらににじり寄るようにして佐橋に迫った。

「映美ちゃん、いつたい君は、なにが言いたいんだい？」

「だから、あたしとママのどつちかをとるとしたら、どつちがいい？」

そう言いながら、映一は、両手をそろえて、佐橋の膝の上に置いた。

「もしかして、君は、私を誘惑しているのか？」

佐橋の言葉に、映一は、その目を食い入るように見つめたまま、ちよつと首を傾げるようにした。「言っていることが、よくわからない」という素振りだが、それは、——女の仕草としては——明らかに肯定の意味あいにとれた。

「君は、志保と私とのことを、知っているのか？」

「ええ、だいたいは。だからあたしは、おじさまを避

けてたのよ。だって、できるなら、ママとはいい関係でいたいでしょ」

今度は、膝にほおずりするようになり、その頭をもたせかけた映一を、佐橋は困惑して見つめた。

「おじさま、あたしがおじさまに冷たくしてたのは、おじさまのことがきらいだからだと思った？　そうじゃないのよ。あたし、最初に会ったときから、おじさまのことが大好き」

「映美ちゃん、もうやめなさい。そんなことは、志保だつてよろこばないよ」

かろうじて言った佐橋の言葉に、映一はふたたび目を上げ、言った。

「いいの。あたし、決めただから」

そして、その手を、佐橋の股間へとそっと伸ばした。

それに最初にふれた時だけは、肩をびくりとふるわせたが、映一は軽く握るように指をはわせ、そこがす

でにじゅうぶん硬くなっているのを確かめると、つづけた。

「……ママの、男を取ろうって」

「……映美」

佐橋は、そうつぶやいて、おずおずと手を伸ばし、映一の髪に触れ、なでた。

映一は、上目づかいに佐橋を見つめ、そのあと、長いまつげをしばたかせた。

一瞬後、佐橋は、なにかを決意するように映一の体を持ち上げ、抱きしめ、そして、そのまま床に寝かせた。

その瞬間、映一は、心の中で叫んでいた。

母さん、僕は勝ったよ。

ひどいやり方で母さんを裏切った父さんと、母さんから父さんを取りあげたこの男を、かならず地獄の底に落としてやるからね。

そう。そこまでは、すべて映一の計算どおりだった。そんなことは初めてであったにもかかわらず、映一は、「中年男を誘惑する若い娘」を、うまく演じきっていた。

しかし、映一は、そこで二つの計算ちがいをしていたのだ。

ひとつは、そんな芝居をしながらも、映一自身が、

そのシチュエーションに飲み込まれ、感応してしまっていたことだ。スキャンテイの中では、映一のもものが、佐橋のもの以上に充血し、うずいていた。

そしてもうひとつは、百戦錬磨の佐橋は、映一が想像しているよりずっと、女を悦ばせる——いや、正確には、女になりたい男を悦ばせるテクニクに長けていたということだった。

5

夏の午後の高い太陽が、窓越しに差し込んでいる。

レースのカーテンはあるのだが、その光線の強さに、さして役に立ってはいないようだ。ただ、ぐったりと

床に横たわる全裸の映一の肌の上に、細かい網の目の影をつけていることで、その存在がわかるだけである。

息づかいとともになまめかしく形を変えるそのレースの模様が、さらに時折、陽炎のように揺らいで見えるのは、クーラーのよく効いた室内で、映一の身体だけが、まだ上気しているせいだろう。

「……立ち上がれないのかい？」

すでにズボンのベルトをとめ終えた佐橋が、映一の

顔をのぞき込みながら、ちよつとからかうような調子で言った。

やつと息づかいが平静に戻ってきた映一は、惚けたような顔で佐橋を見て、うなずいた。

思わず「ふーっ」とため息がもれた。

「ふふ。だめだなあ。女の子は後始末くらい、自分でしなきゃ」

佐橋はさらにおかしそうに笑い、先刻自分も使った

ばかりのティッシュの箱を取り上げると、そこから四五枚抜き取った。

「しかたがないから、私が拭いてあげるよ。こんなにかわいい娘の『処女』をいただいってしまったんだから、そのくらいの罪滅ぼしはしなきゃな」

佐橋はそう言いながら映一の腰のあたりにしやがみ込むと、濡れた映一の内腿をティッシュで拭き始めた。その、ねっとりとした液体の大半は映一のものだが、

秘所から逆流した佐橋自身のものも、まちがいに混じっているはずだ。

「あ……」

佐橋の手が、身体の裏側にまわり、ティッシュがそこに触れたとき、映一は思わず声をあげた。

感じたのではない。痛かったのだ。もしかすると、白いティッシュに、赤い血がにじんだかもしれない。

佐橋は、つづけてもう五六枚ティッシュを引っぱり

出すと、今度は、映一の腹の上にも広がったその白濁液を拭った。そして、そのあと……

「……あんっ」

小さな声だったが、高いトーンの声が映一の口から漏れた。今度はまちがいなく感じたのだ。

その証拠に、ティッシュ越しに握った佐橋の手の中で、映一のそれは、また急速に充血しはじめていた。

「ふふ、さすがに若いね」

佐橋は、また楽しそうに言うと、峻立した映一のペニスニスの先を包むようにして拭った。

「あーっ……」

映一は身もだえ、思わず上半身を起こしかかった。

その感覚に耐えきれず、先刻のように佐橋にすがりつきたくなったのだ。

ところが佐橋は、そんな映一の気持ちをはぐらかすように、さっさとその作業を済ませ、立ち上がってし

まった。

「さあ、服を着なさい」

まるで命令するようにそう言いながら、デスクの上のたばこを取って火をつける。その姿を、映一は切なそうに見ていた。

たばこを一息吸って、ふーっと煙を吐くと、佐橋は、また微笑みながら映一の方を見た。

その視線に、今度は恥ずかしさがこみ上げてきた。

……あ、なんだか僕、ものすごく物欲しそうな顔してる。

その恥ずかしさにどきまぎし、視線を落とすと、まわりの床に、赤いスリッパドレスと、シリコンパッドの入ったブラジャー、それにスキヤンティが、脱いだ——脱がされた——ままの形で、散らばっていた。

映一は、それらのものをあわててかき集め、佐橋の方をちらっと見てから、けだるそうに体を起こし、佐

橋に背を向けて座った。

ブラジャーに腕を通し、ホックをとめる。立ち上がつて、スキヤンティに脚を通す。

その間、映一は、背後からの佐橋の視線を痛いほど感じていた。

佐橋は、そんな映一の様子を、明らかに楽しんでいるのだ。

それはわかっているのだが、映一は、そんな佐橋の

期待に応えるように、ただもじもじと下着をつけるしかない。まるで、処女を喪失したばかりの女の子（「そう、僕は今、ロストバージンしたんだ！」）のように。

スキヤンティを腰まで引っ張り上げたが、まだ勃起したままの——いや、佐橋に見られているという意識から、さらに屹立きつりつしている——それは、中に納まってくれない。なんとか押さえ込もうとしても、布の小さなスキヤンティから半分以上がはみ出してしまふ。

映一は、そのみつともない格好を佐橋に見られまいと、後ろを向いたままスリッパドレスを拾い上げ、あわてて頭からかぶった。

それでも、そこは納まりがつかず、ドレスの薄い布を持ち上げていた。

映一はそれを隠すように、肩をすぼめ、腰の前あたりで腕を交差させて、佐橋の方を振り返った。

「ふふ、かわいいよ」

もじもじする映一の姿をながめて、そう言ったあと、佐橋はこうつけ加えた。

「でも、その口紅、いくら服に合わせたにしても、ちよつと濃すぎるな。映美ちゃんは、若くてきれいなんだから、もつと明るい色の方が似合うよ」

「はい」

映一は、素直にうなずいていた。

その返事には、言外に、「今度からそうします」と

いう意味が含まれているのだが、まだどこか呆然として  
いる映一は、自分でもそれに気づいていない。

「うむ。今日のことは、志保には黙っておくからね」  
佐橋がそう言ったのをしおに、映一はぺこりとお辞  
儀をして、体を小さくしたまま、そそくさと書齋を出  
た。

まだ、スリッパドレスの前がテントを張ったままだ  
つたのだ。

自分の部屋に戻ったあとも、映一は気持ちが悪く落ち着かず、しばらく立ちつくしていた。

自分の体に起こったことが、まだよく理解できない。まるですべてが夢だったような感じだ。

それなのに、体のあの場所には、たしかに、多少の痛みと異物感が残っていた。

しばらくして、映一はやっと自分の机の前に座った。

椅子に腰掛けると、その場所から、何かがじゅくつとにじみ出て、下着を濡らした。

映一は、それに動揺しながらも、机の上に、メイク用に使っているデスクミラーを置き、そこに自分の顔を映してみた。

鏡の中の顔は、化粧がひどく乱れていた。

汗のせいだろう。ファンデーションが浮き、シヤド―もとれている。

その上、真つ赤な口紅が、擦れたように唇からはみ出し、頬のあたりまで伸びていた。

それは、先刻、佐橋の激しいキスに耐えきれなくなつた映一が、逃れるように首を振つた時のものだろう。

映一の頭に、一時間ほど前のことが、まるで遙か昔の出来事のように、そして一方で、今もまだつづいて  
いることのように浮かんできた。

床の上に映一を押し倒した佐橋は、映一の唇に自分の唇を押しあてると、巧みにそれを動かして、口を開けさせた。佐橋の舌が、まるで自然な感じで口の中に入ってきたので、——そのくらいのことには覚悟していた——映一は、それを受け入れた。

ところがそこで、佐橋の舌は性格を一変させ、映一の口の中をまるでかき回すように動いた。

苦しくなった——それに、「男に抱かれる」という

ことにまだ多少の抵抗感が残っていた——映一は、逃れるように首を振った。

いったんは唇が離れたが、背中側にまわした佐橋の手が首筋をがっちりと押さええているせいで、それ以上は逃れられない。

「だいじょうぶ、ひどいことはしないから」

佐橋はそう言いながら、ふたたびキスしてきた。そして、同時に、映一の腰にあてていたもう一方の手を、

裾の方に動かした。

その手は、スリッパドレスの感触をしばらく楽しんであと、それをまくり上げるようにして、映一の太股を撫ではじめた。

「……あ」

映一が、その手の動きに気を取られていると、ふたたび佐橋の舌が口の中に入り込んできて、今度はゆつくりと映一の口の中をねぶった。

太股の手は、それと連動するように、内腿のあたりを探る。

むだ毛もきれいに処理してある映一の柔らかな内腿の肌は、ちよつとざらついた感じの佐橋の掌の感覚を、いやが上にも敏感にとらえていた。

佐橋の手は、やがて、じりじりと太股の合わせ目あたりに迫る。

映一は、まだ驚いたような表情で、瞳を大きくあけ

て佐橋の顔を見ていたが、その手が、そこに近づいたことで、目を閉じた。

ところが、その手は、映一の秘所と秘芯をじらすように迂回し、ドレスの内側に差し入れられた。

そして、腰からウエスト、胸へと、映一の体の敏感な部分を巧妙に探り当て、そこをたどりながら上がってきた。

いつしか、映一は、その手の動きに誘導されるよう

に、体をくねらせていた。

その頃には、舌の動きは、また先刻のように激しくなっていたが、もう映一には抵抗する気がなくなっていた。それどころか、映一は、自分の舌をそれにからめたり、その舌を吸ったりさえしていた。

「ん、あーん」

鼻腔から漏れる息が、知らず知らずかん高い甘え声になっている。映一は、まるで女のような自分の声を

聞いて、よけいに感覚を高めていった。

佐橋の手は、すでに首筋のあたりを撫でていた。そのせいで、スリップドレスは、肩までまくれ上がり、映一は、佐橋の体の下で、ブラジャーとスキヤンティだけの体をあらわにしていた。

佐橋は、さらに、映一の腋の下から二の腕、手首、指先まで、その性感帯を探りながら、ドレスを両腕から抜いていった。

頭から抜き取る時、唇が離れたせいで、映一は、思わず、その唇を追おうとした。

と、佐橋は、映一の口に軽くキスしたあと、今度は映一の体の上にまたがり、両掌で、ブラジャーのふくらみをつかんできた。

「ほら、見てごらん」

佐橋に言われ、首をもたげると、その両手が、自分のかわいいデザインブラの胸をもむのが見えた。

「……あーん」

今、僕……あたし、おじさまに、胸を……。

中身はシリコンパッドであるにもかかわらず、映一には、それが、自分の肉体の一部のように感じられた。

「ふふ、こんなもんじゃなく、今度はもつと感じさせてあげよう。目を閉じてごらん」

佐橋に言われるまでもなく、その感覚に耐えきれなくなっていた映一は、もたげていた首をそらし、目を

閉じた。

と、佐橋は、背中に腕をまわし、ブラジャーのホックをはずすと、シリコンパッドごと、それ抜き取ってしまった。そして、今度は、映一の素肌の胸に、直接両手をあてがった。

佐橋の掌は、細身の映一の胸全体を覆ってしまうほど、大きかった。そして、なにより巧みに動いた。

長年の経験なのか、佐橋は、まるで、そこに本物の

ふくらみがあるかのような手の動かし方をするのだ。

目を閉じている映一は、佐橋の手の中に、自分のたわわな乳房があるような錯覚に陥っていた。その柔らかな肉を包んだ肌を、大きくて骨太な佐橋の掌が翻弄し、押しつぶし、こね、揺する。映一の頭の中には、はっきりとそんな姿が像を結んでいた。

それは、まるで魔法のようだった。

そう。おじさまの魔法で、あたし、本物の女の子に

なれたんだわ。そして、今から……女に……ああ。

「……ああ」

映一は、のけぞりながらそう思った。

しかし、映一が、なんであれ、ものを考えられたのはそこまでだった。

そんな映一の表情を見て取った佐橋が、身をかがめ、映一の乳首に口づけ、吸ったからだ。

「あ、あーん……」

映一はもはや、なにも逆らえなくなっていた。佐橋のなすがままにのたうつしかない人形だった。

佐橋が、徐々に唇をはわせ、脇腹をなめ、へそのあたりを舌で弄び、そして、いつの間にかスキヤンティを剥がされていたその部分をしゃぶった時でさえ、佐橋の口の中にあるものが、じつはそそり立つペニス——つまり、自分が本来は男——であることさえ忘れ、ただ官能にふるえるだけだった。

だから、その間に、口でそうしながら、佐橋が自分のズボンと下着を取っていたことにも気づかなかつたのだ。

やがて佐橋は、映一の太股を持ち、自分の肩の上に抱え上げた。

「ほう、体の柔らかかなところは、やはり志保ゆずりだね」

佐橋は、映一の体を折り曲げるようにしておおいか

ぶさつてきなながら、そう言った。

父の女装名を耳にして、映一は、一瞬だけ、自分がこの部屋にやってきたもとの目的を思い出した。しかし、次の瞬間には、ふたたびすべてを忘れていた。

「……いっ」

佐橋の体の重みとともに、激しい痛みが体を貫いたのだ。

そのあとのことは、なにがどうなったのかよく覚え

ていない。

最初の痛み、そしてそれが動き出してからの痛みに、  
何度か気を失いそうになった。

それなのに、やがてその覚醒かくせいと昏倒こんとうの狭間を行き来  
していることが、波のまにまに浮かんで海の中を漂っ  
ているような快感になっていった。

やがて、体の中を、太く大きなものがかき回してい  
るのが実感できるようになった。

そして時折、その大きなものの先が、体の奥で、ある部分に触れると、全身に「電気」が走った。自然に全身がふるえ、有り体に言えば「ちびりそう」になる。その瞬間は、自分という存在が壊れてしまいそうで、ひどくこわいのだけけれど、それが去ると、また、その瞬間が訪れるのを待ち望んでいる。映一は、そんな感覚になっていた。

おそらく映一は、大きな声を出しあえいでいたにち

がない。しかし、その自分の声さえ、どこか遠くから聞こえてくるような、そんな感じだった。

気がつくのと、自分の腹の中で、なにかがどくどくと放出される感じがあり、そのあたりから始まった充足感というようなものが、体全体を満たしていった。そして、その感覚が頂点に達したとき、体が痙攣し、映一自身のものからも、液体がほとばしっていた。

もちろん、映一も十九歳。マスターベーションは頻繁にするし、じつは高校時代に一度だけ、ガールフレンドと行くところまで行ってしまった経験もある。しかし、先刻の感覚は、とてもそれらとくらべものにならないかった。

いや、それはたしかに別次元のものなのだ。

自分ではなにをすることもできない姿勢に固められ、ただされるままになって、すべてを受け入れてし

もう快感。自分の存在そのものが、果てしない無の中に溶けていってしまふようなその甘美な感覚は、男性からは、けっして味わえないものだ。

今、鏡の中の顔を見ながら、映一は、そう感じていた。

その顔には——乱れた化粧にもかかわらず——、たしかに、昨日まではなかった「愛される女」としての美しさが加わっている気がした。

「あたし……、おじさまのこと……」

クレンジングクリームをとりながら、映一は、つぶやいていた。

夜になり、父が会社から帰ってきた頃になって、やっと映一は、ある程度の正気を取り戻した。

父が、いつものように女装し終わる頃を見計らって、映一は階下に降りた。

「今日は、何つくろうか？」

「冷蔵庫の中、あんまりたいしたもの、残ってないわよ」

「ひき肉はあったんじゃない？」

「うん。じゃあ、ハンバーグ？」

「それも能がないわね。……キャベツは？」

「まだ使っていないのがひと玉あるけど……あ、ロールキャベツ？」

「ピンポーン」

映一は、昼間の佐橋とのことはもちろん、父に対して復讐しようと思った気持ちさえおくびにも出さず、なに食わぬ顔で、父と並んで台所に立った。

昼間あんなことがあったというのに、自分がそんなふうに見えることに、映一自身が内心、ちよつと驚いていた。

男の時は、もつとストレートに感情が顔に出るはず

だ。

「あら、映美、今日は、いつもより肌がしっとりして  
るわね」

キヤベツをはがしている映一を見て、ブイヨンベ  
スをつくっている父がそう言ったときは、ちよつとど  
ぎまぎしたが、映一はすぐに、「うん、さつき、シヤ  
ワー浴びてメイクし直したから」と答えた。

「そうよね。昼間暑かったものね」

父は、それ以上、なにかを勘づいた様子はない。

「でも、映美、ほんとにすごきれいよ。こんな美人の娘をもつて、ママ、幸せ」

ちよつとおどけた感じでそう言った父に対して、映一は「ママ譲りだつて、言いたいんでしょ」と笑つてみせた。

なぜ、自分は、こうも平然としていられるんだろう？  
微笑みながら、映一は、ふたたびそう思った。

佐橋とあんな関係を持ったことを、今はまだ、父に知られない方がいい。もつと佐橋を「その氣」にさせてからの方が、父の痛手は大きいにちがいない……たしかに、そんな思いもある。

でも、そんな策謀とは別に、今、映一は、さほど意識することなく、自然にそう振る舞っているのだ。

映一は、父自身のことを考えてみた。

この半月ばかり、おそらくは毎夜、父は佐橋と、昨

夜のようなことをしていたにちがいない。それなのに、映一の前では、まったく何食わぬ顔で過ごしていた。

もちろん、息子にあんなことを知られたくはないだろう。だが、父も、苦勞してそれを隠しているふうではなかった。

それは、父が、「女が身についている」からではないのか。

自分が、好きな人の前で見せる痴態はそれとして、

まったく別の次元で、すましていられる。それが、女  
というものかもしれない。男はもつと、臆病にほころ  
びを出す。

そして、それはたぶん、「自分は愛されている」と  
いう自信からくるのだ。

同じ女として、この人に、弱みは見せられない。

たぶん、自分は今、本能的に、昨日までの父と同じ  
ような感覚で行動しているにちかない。

映一はそう思った。

やはりいつものように、父が夕食の一人前をとりわけ、佐橋のいる書斎に持って行っている間、しかし映一は、また動揺していた。

佐橋はああ言ったが、父に対して、今日の出来事を言わないという保証はなにもない。

復讐しようという以上、いずれは父に事実を突きつけることになるにしても、今はまだまずい。今知られ

れば、敗北するのは、おそらくこちらなのだから。

映一がそう思いながら、食卓に父と自分の夕食を並べていると、佐橋の部屋から父が戻ってきた。

その様子は、ふだんと変わるところはなかった。

佐橋は、言っていたとおり、黙っているようだ。もつとも、長年の「恋人」である父に対して、佐橋自身から言えるようなことでもないだろう。

映一はそう思い、胸をなで下ろした。

ところが、そんな心配とはちよつとべつの思いが、その夜から、映一の心をかき乱した。

その夜も、映一はしばらく寝つくことができなかつた。

ベッドの中で、昼間のことを思い出したこともあるのだが、それ以上に、映一の頭には、べつの光景がよみがえっていた。昨夜、目撃した父と佐橋の情事だ。

おそらくは今頃、階下の父の寝室では、父と佐橋が、昨夜と同じことをしているのだろう。

あのおじさまが、昼間、あたしにしたのと同じように、ママに……。

そう思うと、なぜか、胸がかきむしられるような気がした。

6

そして翌朝、父が会社へ出たあと、映一は当然のよう  
に、佐橋の部屋へ行つた。

前日の口紅に関する忠告から考えて、佐橋はもつと

清楚で若々しい感じが好きなのだと思います——もちろんそこには、大人の女を演じる父に対する対抗心もあり——、お嬢様女子校の制服のような感じの白いブラウスとチェックのスカート姿で、佐橋の前に立った。

「ふふ、やっぱり、来たね」

佐橋は、デスクから立ち上がりながらそう言った。

そんなふうに言われることは、ちよつとしやくに障る気もしたが、早く佐橋の気持ちをも、父ではなく、自

分に向かわせるためには、父のいない時間を有効に使いたかった。……というより、映一自身が、昨夜からのもやもやははらすために、そうせざるを得なかったのだ。

「かわいいよ」

佐橋は映一に近づき、肩に手をかけて、おでこにチユツとキスした。

映一はそれが不満で、ちよつとふくれた表情で佐橋

を見上げ、自らの唇を突き出した。

佐橋はまた笑って、今度は映一の体を包むように抱いて、その唇にキスしてきた。

映一も、佐橋のがっちりした体に腕をまわし、それに応えた。

佐橋は、世代のわりに身長がある。映一や父より、ほぼ頭ひとつぶん大きい。肩幅も広く、胸も厚い。

そんな佐橋に抱きすくめられ、映一は、自分が小さ

くて細いのだという感覚を持った。中学生の頃はいやだと思っていたそんな自分の体格的な弱点を、今、映一は楽しんでいた。

あたしは、小さな弱い……女の子。

狭い部屋のききすぎるほどの冷房の中で、自分を包み込んでくる佐橋の体温を全身で感じ、幸せな気分に浸ることができたのだ。

長いキスが終わり、唇を離すと、佐橋は映一の頬を

両手で挟むようにして言った。

「こんなにかわいい顔をして、この娘は、本当に大胆なんだから」

佐橋は、デーブキスで差し入れた舌を、映一が思いきり吸ってきたことを言ったのだ。

「そうよ。あたし、おじさまの前でなら、どれだけでも大胆になれる気がするの」

「ふふ、言うね。じゃ……、たとえば？」

佐橋の言葉に妖しい表情を浮かべて笑い返すと、映一は、佐橋の胸に置いた手でその体をたどるようにしながら、体を沈めていった。

ひざが床につくと、映一は、ちょうど佐橋のズボンの前の部分に達した掌で、その部分をゆっくりと確かめるようにさすった。

佐橋のものは、ズボンの中ですでにある程度怒張していたが、映一の手の刺激によって、目に見えて硬く

なつてきた。

「……うふ」

映一は、思わず声に漏らしていた。

佐橋のものが、これだけで、いともたやすく大きくなつてきたことがうれしかったのだ。それは、佐橋が自分の魅力を認めている証拠だった。体はうそをつかない。

しかし、ふたたび佐橋の顔を見上げながら、映一は、

わざとおびえたような表情をつくってみせた。

佐橋は、そんな映一の小芝居などお見通しにちがいないのだが、微笑みながら見下ろし、安心させるように映一の頭をなでた。

ベルトをはずし、ファスナーをおろし、トランクスを引き下げると、佐橋のものは、まるでうなりを上げるように、映一の目の前にそそり立った。

それを見た瞬間、映一には、もう芝居してみせる余

裕などなくなっていた。

それは、佐橋の年齢を感じさせないほど、強烈に自己主張していたのだ。

長さもじゅうぶんなシャフトが、鋼のように揺れながら反り返っていた。なにより、それは、映一の口に簡単には入りそうもないほど、太かった。

こんなの、くわえられるかしら……。

映一は、一瞬、本当に不安になった。

でも、昨日は、これがあたしの体の中に入ったんだし……。

「自分の体に入った」……そう思ったとたん、映一は、それが、この上なく愛おしいものに思えてきた。

映一は、パステルピンクの口紅が塗られた可憐な唇を、おずおずとその先に押しあてると、次第に口を開いていった。

唇と、そして前歯に、佐橋の鼓動が伝わった。

舌を佐橋のもの先に押しあてると、そこからこぼれた最初の一滴の味が、口の中に広がった。

映一は、その「男の味」を、自分はけっして嫌いではない、と思った。

その日も、佐橋は、そんな映一を何時間にもわたって抱いた。

そして、そのまた翌日も、さらに次の日も、映一は、

昼間、佐橋に抱かれた。

一週間もたたないうちに、映一は、朝父が出ていくとすぐに書斎に行き、夜父が帰る寸前まで、佐橋のそばで過ごすというようになっていった。もはや書斎に隠れている必要のなくなった佐橋は、父のいない間は、居間やダイニングや映一の部屋で平然と過ごし、映一もそのそばを一時も離れず、どんな——セックスしている以外の、たとえば佐橋が例の商談のための国際電

話を掛けている——時でさえ、その足元にじゃれつき、佐橋のものを引っぱり出すチャンスをかがったりした。

映一は、もはや、佐橋に夢中になってしまっていた。

客観的に見れば、この道では百戦錬磨の佐橋が次から次に繰り出すセックステクニクに、若い映一が、我を忘れてしまったということなのかもしれない。

だが、映一の方は、佐橋に心底から恋していた。

そして、佐橋も、必要以上に、映一を女の子として扱い、「恋する若い娘」をつくることを楽しんでいた。

その結果、前にはまだ多少残っていた、男としての照れも、いつの間にか映一のそぶりから消えていった。

そうなれば当然、当初は父と佐橋に復讐することが目的だったはずが、佐橋はその対象からはずされ、父に対する復讐心も、いつしか、嫉妬心と区別がつかなくなっていた。

佐橋は、年齢に似合わぬタフさで、毎日、昼は映一を、そして、夜は父を相手にしているようだ。

映一は、なによりそれが面白くなかった。

「おじさまは、あたしのものよ！」

映一は、父のいるときはいまだなに食わぬ顔で暮らしながら、そう宣言したくてしかたなくなっていた。

そして、そんな思いが爆発寸前になっていたある日、その導火線に火をつけるきっかけとなる知らせが、海

の  
向  
こ  
う  
か  
ら  
や  
っ  
て  
来  
た  
。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

**完全版を入手する**

# エディプス・パーティ

Oedipus Party

<公開版>

CopyRight 1996 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500